ソクラテスにおける「無知の自覚」と「知の表明」

小　島　和　男

1. はじめに

今日に至るまでのソクラテス研究において、活発に論じられてきた問題に、ソクラテスの「知の表明」の問題がある。『ソクラテスの弁明』において「美しく善なることを全く知らない」と言い「無知の自覚[1)]」を表明するソクラテスが、同作品内において、倫理的事柄に関して知を表明しているというのはどういうことか[2)]。

---

1) 「無知の自覚」と言うときの「自覚」だが、後の引用箇所、21d4〜8 では、「知らないと思っている（*οὐδὲ οἴομαι*）」というように、*οἴομαι* としか出てきていない。これは単純に「思う」ということを意味するのみである。はっきり「自覚」と訳しうるのは、ソクラテスが神託を聞いた後に、「大にも小にも自分が知者でないことを自覚している（*οὔτε μέγα οὔτε σμικρὸν σύνοιδα ἐμαυτῷ σοφὸς ὤν*）」という 21b4〜5 の *σύνοιδα ἐμαυτῷ* である。この *σύνοιδα* は（あくまでも自分のことをではあるが）「知っている」とも訳しうる言葉で、ただ「思う」だけではなく非常に強い意味の語である。実にこのことが、2 節で導き出されている、ソクラテスが自らの無知については「知がある」という表現が出来ているということの証左のひとつになる。

2) 「知」を表す語は、今回の引用のなかでは、主に、*οἶδα*、*σοφός*、*σοφία* である。J. Lyons, *Structural Semantics*, Oxford, 1963, p. 126 でも強く言われているように、*σοφία* は、*σοφός* に関係付けられた抽象名詞である。*σοφός* はその人に属する何かを表すのではなく、「賢い」というその人の状態を表す。「知がある」「知を持つ」と訳しても、その知が具体的に何についてのものか、どのようなものかなどが特に問題にされなければいけないことにはならない。よって、*σοφία* も、通常、その中身を問題としない。故に *σοφός* である神の知もその中身は問題とならず、人間の知 *ἀνθρωπίνη σοφία* もそれを持っている人間がどういう状態かは問題となるが、その知の中身をわざわざ問題とする理由は無い。よって、何らかの

問題の『ソクラテスの弁明』においての「知の表明」は、以下のようになされている。

「他方で、不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜であることは知っています。従って私は、悪いことどもであると知っている悪いことどもよりも先に、よいことどもであるかどうかも知らないことどもを、決して恐れることもなければ避けることもないのです (29b6〜c1)[3]」

アーウィンは、知識と信念の区別でそれを解決しようとする[4]。ソクラテスが知らないのは確かに知識であるが、知っているように表明するのは、事実上、知識ではなく信念であると解釈する。しかし、何故単なる信念を「知っている」と語らせるのかについての答えは与えてくれておらず、さらには『ソクラテスの弁明』29b に関しては例外的であるとしてしまっている[5]。

ヴラストスは「確実な知識」と「エレンコスによって正当化された知識」を区別する[6]。そして、「無知の自覚」における知を前者、「知の表明」における知を後者とする。このヴラストスの説は、『ゴルギアス』508 e〜509a に現れる「鉄と鋼のロゴス」に関して考えるとき、非常に納得の行くものであるが、この『ソクラテスの弁明』29b にあてはめるとどうだ

中身を問題とするときは、*οἶδα* が使われているわけだが、23b3 では、*γιγνώσκω* が使われている。この違いはライオンズも検証したところの (*ibid.*, p. 206)、*Liddell and Scott* で言われているような「観察」と「内省」の違いでも説明できるかもしれない。この場合、*γιγνώσκω* の対象となっているものは、神という視点から「観察」されうるものでもあるからである。

3) プラトンのテクストの引用はすべて『ソクラテスの弁明』からのものであり、E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson et J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford, 1995 に従った。

4) T. Irwin, *Plato's Moral Theory*, Oxford, 1977, pp. 39–41.; idem, *Plato's Ethics*, Oxford, 1995, pp. 27–29.

5) T. Irwin, *Plato's Moral Theory*, p. 58.

6) G. Vlastos, *Socratic Studies*, Cambridge, 1994, pp. 55–56.

ろうか。「知の表明」の内容である「不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜であること」は果たして「エレンコスによって正当化された知識」と言えるだろうか。少なくとも『ソクラテスの弁明』内において、その証左となる記述は見当たらない[7]。

ブリックハウス＆スミスは、「事実的知識（know that ～ で表される知)」と「遂行的知識（know how or why ～ で表される知)」に区別して問題を解決しようとしている[8]。「無知の自覚」におけるソクラテスの知らない知は、後者となるわけだが、しかし、そのように取れる箇所をいくつかの対話篇から集めて推測しているのであって、そのように区別する根拠を、はっきりと『ソクラテスの弁明』の中から見つけているわけではないため、説得力は薄い。このことは無論、ヴラストスの「確実な知識」にも当てはまる。

実のところ、彼らが行っているのは、『ソクラテスの弁明』をはじめとする諸々の対話篇から意図的にソクラテスの発言を抜き出し[9]、それらを、テクストの外から持ってきた特定の知識論の構図にあてはめているといったことなのである[10]。というのも、「無知の自覚」における知、ソクラテスの知らない知に関しては、『ソクラテスの弁明』の中においては、その記述内容が非常に限られているからである[11]。その知は、「美しく善なること」に関する知であり、本当の知者である神のみが持ちうる知だというのが、『ソクラテスの弁明』でそれについて言われていることのほぼすべ

---

7) cf. T. Irwin, "Socratic Puzzles", *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 10, 1992, pp. 241-266, p. 251.

8) T. C. Brickhouse & N. D. Smith, *Plato's Socrates*, Oxford, 1994, pp. 38-45; iidem, *The Philosophy of Socrates*, Boulder, Colo., 2000, pp. 101-111.

9) D. Wolfsdorf, "Socrates' Avowals of Knowledge", *Phronesis: A journal for Ancient Philosophy*, 49-2, 2004, pp. 75-142 では、特にヴラストスをあげて、ソクラテスの発言を文脈から切り離して抽象化することを批判し、それぞれの対話篇で描かれているソクラテスの知の表明が、すべて一様に解釈できるわけではないという主張がされている。

10) 加来彰俊「ソクラテスのいわゆる「知の否認」をめぐって—『ソクラテスの弁明』29B6-7への注—」『西洋古典研究会論集』第11号, 2002, pp. 1-20 では、そもそも知識論的な議論をすることに関して疑問が投げかけられている。

11) 直接的には 23a においてのみである。

てである[12)]。

よって、テクストに従って明確に言えるのは、ソクラテスの知らない知は、神の知であり、ソクラテスの知ることが出来ないような知であるということだけである。解釈とは言えないかもしれないが、それが確実な説明である。そこで今回は、テクストの外から何らかの構図や想定を持ち込むのではなく、あくまでもテクストとその文脈、それらだけを頼りに、『ソクラテスの弁明』の中の当該箇所を追っていき、『ソクラテスの弁明』における「無知の自覚」と「知の表明」の関係を探りたい。

2. 無知の自覚

ソクラテスが、「美しく善なることを全く知らない」と言っているのは、政治家よりは自分のほうが知恵があると考えたその根拠を述べている際のことである。ソクラテスは神託を反駁しようと試み、まず最初に政治家のところに行ったのであった。

「というのはおそらく、私たちのうちどちらも、美しく善なることを全く知らないのだが、一方で彼は知らないのに何だか知っていると思っており、対する私は、実際知らない通りそのままに、知らないと思っているからなのです。確かに、その人よりは私は、何だかそのような小さな点で、より知があると思いました。知らないことを知らないと思っている点で (21d4〜8)」

政治家もソクラテスも、「美しく善なることを全く知らない (*οὐδὲν καλὸν κἀγαθὸν εἰδέναι*)」と言われている。無知なのは、ソクラテスだけ

12) 『ソクラテスの弁明』においてソクラテスの持っていない知自体が問題となることは無い。問題になるのはその知に関わるソクラテスの在り方である。cf. 加藤信朗『初期プラトン哲学』, 東京大学出版会, 1988, pp. 104-111.

ではなく、政治家もそうである。しかし、政治家は「何だか知っていると思っており（*οἴεταί τι εἰδέναι*）」ソクラテスは、「知らないと思っている（*οὐδὲ οἴομαι*）[13]」ため、自分自身を間違って過大に評価していない分、ソクラテスのほうが「より知がある（*σοφώτερος*）」ことになるわけである。

しかし、ソクラテスは、「自分が知らないということを知っている」という言い方はしていない。あくまでも「知らないと思っている」という表現をしている。

また、そのあとの「より知がある（*σοφώτερος*）」という比較級を用いた表現にも留意したい。ソクラテスは、「美しく善なることを全く知らない」けれども、それを自分が知らないということは、自覚することが可能であり、それを「知がある」という言葉で言い表すことをしているのだけれども、結局はそれも比較しての「より知がある」でしかないのである。ソクラテスと政治家では、「美しく善なること」に関しては等しく無知どうしではあるが、その自覚の有無のみが差となっている。

さらに、その知らないという点でより知があるというこの「無知の自覚」に支えられた神託の解釈は、ソクラテス自身によって、

「しかし実際はおそらく、諸君、神が本当に知者なのであり、あの神託においても、人間の知はほとんど価値がないか、全く価値がないということをおっしゃっていたようなのです（23a5〜7）」

というようにまとめられているが、あくまでも、「おそらく〜のようだ

13) 政治家は、知っていると「思っている」、ソクラテスは、知っていると「思っていない」という思っているかいないかの対比を表していると考えれば、この *οὐδὲ οἴομαι* の *οὐδέ* は、*οἴομαι* に直接かかり、「[知っていると] 思っていない」と訳すべきかもしれないが、今回は、後の知の表明の箇所とあわせて、思っている内容の対比ととったため、*οὐδέ* は意味的に、隠されている *εἰδέναι* にかかっているととり、このように訳出した。先の引用の最後 21 d8 はこれにあわせた。

(κινδυνεύει)」と言われているように、ソクラテスの推測の域を出ていないことにも留意したい。

そのあとで、ソクラテスは神の意図を推測する。

「人間たちよ、きみたちの中で、最も知がある者は、正にソクラテスのように、知に関しては、自分は本当に何の価値もない者なのだということを分かった（ἔγνωκεν）者なのだ（23b2〜4）」

「知に関しては…何の価値もない」とは、「知を持っていない」ということを意味する。人間は知を持っていない存在なのだというわけである。ここでの知とは勿論「美しく善なること」に関するものである。また、もし、自分は「知を持っていない」のだということが分からず、「知を持っている」と考えてしまった場合、その状態は、「自分は本当に何の価値もない者なのだということを分かっ」ていない、言わば「無知の無自覚」というような状態であると言える。

また、この神託解釈も、ソクラテスの推測の域を出ない。勿論、ソクラテスは神託の内容の真実性を限定するわけではない。しかし、その神託における神の意図は、人間にとっては推測しか出来ないものなのだということである。「神は、そう言うかのごとく（ὥσπερ ἂν εἴπον ὅτι…）、…このソクラテスのことを語っているようだ（φαίνεται）」と、あくまでもソクラテスの推測なのである。

以上で、自らの無知に関しては、そのことで以ってソクラテスが限定的ではあるが「知がある」という表現が出来ているということ、および、無知の内容である「美しく善なること」に関する知についても、人間に絶対手に入るものではないと断言して語っているわけではないのだということが確認出来た。

3. 知の表明①

先に引用した「知の表明」の箇所であるが、その直前に、

「私は、あの世のことどもについてはよくは知らず、その通りにまた知らないと思っています (29b5〜6)」

とあり、「知の表明」は、「あの世のことども」についてよくは知らない (*οὐκ εἰδὼς ἱκανῶς*) ということとの対比で表れているということが確認出来る。この「あの世のことども」については、「よくは知らない」状態であり、そこから、「知らないと思っています (*οἴομαι οὐκ εἰδέναι*)」と明言しているが、ここが特徴的である。最初の部分否定では、「よくは知らない (*οὐκ εἰδὼς ἱκανῶς*)」と言っているわけだから、ソクラテスは「あの世のことども」に関して、限定的な仕方で知らないとは言えない部分もあることが読み取れる。しかし、「思う」、いわば自覚をする段になると、その部分否定は姿を消している。「よくは知らない」と「思う」のではなく、端的に「知らない」と「思う」のである。

「死を恐れることは知がないのにあると思っていること」という上記の引用の直前のソクラテスの言明では、この死、および「あの世のことども」に関して、それを恐れないことは、自らの無知を自覚していることとされている[14]。その意味で、先の「無知の自覚」にあるように、他の多数の人々と違い、ソクラテスはより知があることにもなる。死についても、それを恐れていないという点で、ソクラテスには他の多数の人々と違い、より知があることになるのである。それ故、ソクラテスはそういった文脈では、「あの世のことども」に関して、他の人と同じように無知であるわ

14) 29a2〜b2.

けではない。無知であると自覚しているというただ一点で、ソクラテスには、比較してではあるが、知があるため、「よくは知らない」は、部分否定で語られているのである。さらに、知らないと自覚することがその知に繋がるために、自覚の段になったときには、部分否定では表されない。つまり、〈「よくは知らない」=「知らないと思う」〉という図式が成立する[15]。なお、「無知の自覚」の場面において、「美しく善なること」についての知が、全否定で表されているのは、文脈上、政治家とソクラテスが並べて語られている時点であり、まだソクラテスが、「無知の自覚」をして、より知があると明言する前の言葉だからである。

4. 知の表明②

次に、正に知を表明している箇所を見ていく。「他方で、不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜であることは知っています (*οἶδα*)」という箇所では、正にソクラテスは知を表明していると言える。しかし、それは「美しく善なること」についての直接の知を表明しているのではない。ソクラテスの「無知の自覚」は、あくまでも、美しく善なることを全く知らないということであった。つまり、その「美しく善なること」以外のことどもに関しては、知っている可能性を否定していない。

つまり、ここでの知は、「悪であり醜」についての知である。しかし、「美しく善なること」を全く知らずして、その反対である「悪であり醜」については知っているというのはどのようなことか。

その答えは、つづく「従って私は、悪いことどもであると知っている悪いことどもよりも先に、よいことどもであるかどうかも知らないことどもを、決して恐れることもなければ避けることもないのです」というソクラ

15) E. de Strycker & S. R. Slings, *Plato's Apology of Socrates*, Leiden, 1994, p. 327 によれば、前後を結ぶ *οὕτω καί* は、その前後の一致を強調しているとのこと。

テスの発言の中にある。この発言の中には対比がある。それは善美という価値に対する、悪醜という反価値、といった対比ではなく、「悪いことどもであると知っている悪いことども」と「よいことどもであるかどうかも知らないことども」の対比である。またそれらは先の二つと勿論、対応している。「悪いことどもであると知っている悪いことども」とは正に、先にもはっきりと「知っています (*οἶδα*)」と言われていた「不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないこと」であり、「よいことどもであるかどうかも知らないことども (*ἃ μὴ οἶδα εἰ καὶ ἀγαθὰ ὄντα τυγχάνει*)」は、知らないと自覚しているところの、「あの世のことども」ということになる。

「悪いことどもであると知っている悪いことども」があるからといって、「美しく善なることを全く知らない」という「無知の自覚」と、齟齬をきたさない可能性は、「よいことどもであるかどうかも知らないことどもを、決して恐れることもなければ避けることもない」ことから読み取れる。

「悪いことどもであると知っている悪いことども」と「よいことどもであるかどうかも知らないことども」の二つのうち、本当によいことどもである可能性がある、もしくはソクラテスにとってその可能性が高いのは、「よいことどもであるかどうかも知らないことども」のほうである。故に、「悪いことどもであると知っている悪いことども」を選ばずに「よいことどもであるかどうかも知らないことども」を選ぶのは、ソクラテスにとっては当然の選択なのである。

5.「無知の自覚」故のソクラテスの選択

ソクラテスがその「悪いことどもであると知っている悪いことども」を選ばずに「よいことどもであるかどうかも知らないことども」を選ぶのは、「無知の自覚」の故である。ソクラテスの語る「悪いことどもであると知っている悪いことども」の内容は、「不正をなすこと、神であれ人間であ

れ自分より優れた者に従わないこと」であり、つまりここでは、神によって命ぜられた（とソクラテスが理解している[16]）哲学の活動を止めることを意味する。哲学の活動を止めることは、それ以外の行動を選ぶことである。それでは、知者である神の命令に反しているという点で、自らを神よりも判断において優れている者であるとみなしていることになり、「知恵を持つに値しない」と自らを思っていることにはならなくなってしまうのである。付言すれば、人が「[ソクラテスが] 悪いことどもであると知っている悪いことども」を選ぶことが出来るのは、「無知の無自覚」故と言える。

それ故、ソクラテスはそうではなく、「無知の自覚」故に、「よいことどもであるかどうかも知らないことども」を選択することになる。「よいことどもであるかどうかも知らないことども」とは、「よくは知らない」「あの世のことども」である。

このような選択しか出来ないのは、ソクラテスは「美しく善なること」を知らないが故にやむを得ない。「美しく善なること」に関しては全く知らないので、「美しく善なること」をそれとして選び行動することは出来ない。偶然そうであったとしても知りようがない。しかし、ここでは「悪いことどもであると知っている悪いことども」があったため、そうではない「よいことどもであるかどうかも知らないことども」をソクラテスは選ぶことが出来たのである。

ここでの行為は、ソクラテスのこの場合での特殊な事例であり、選択肢となるような行動にせよ、その他の状態にせよ、すべてが「よいこと」と「悪いこと」の二つに峻別出来るということを示唆してはいない。またもし仮にそうであったとしても、ソクラテスは勿論「美しく善なることを全く知らない」わけであるから、その峻別はソクラテスには出来ない。ここで峻別されているのは、そこでソクラテスの目の前にある二つの選択肢

16) 28e4～6.

(「美しく善なることを全く知らない」わけであるから、以下の二つで行動のすべての選択肢を包括する)、つまり「悪いことどもであると知っている悪いことども」と「よいことどもであるかどうかも知らないことども」の二つなのである。

しかし、そのような、悪いことをしないようにするという行動によって、限定的な意味ではあるが善を知っていることに近づいている、といった意味での善の知り方は、もちろん端的に善を知っているといえる状態ではないが、それをある種の知と言い表すことを許容出来る知り方なのであり、先の「より知がある (*σοφώτερος*)」と言い表されるソクラテスの状態に繋がる。というのは、先の「より知がある (*σοφώτερος*)」というソクラテスの状態は無知を自覚した状態だからである。

つまり、その「無知の自覚」は、自分が善を知らない状態にあると自覚しつつも、その無知の上に胡坐をかかずに、何とか善を目指していこうとすることを示唆しているのであり、知らないが故に何をやってもかまわないということを示唆しているわけではない[17]。「知の表明」はそれをあらわしており[18]、『ソクラテスの弁明』でソクラテスの語る自身の行動がその証左となっているだろう。

知らないが故に何をやってもかまわないのでなければ、また何もしないでいるわけにもいかないのであれば、何をどうすればよいのかというと、「知っている者に従うこと」が、その「無知の自覚」という状態においては、まず、選択出来ることだろう。その知っている者は、第一には『ソクラテスの弁明』では、絶対的な知者である神ということになる[19]。

そのために、ソクラテスは、ただ、優れている者に従うのではなく、「従わない」「従っていない」という事態や状態にならないように行動をした。それは神託に対してのソクラテスの行動から明らかである。「ソクラ

17) 荻野弘之『哲学の饗宴』日本放送出版協会, 2003, pp. 49–50.
18) cf. Strycker & Slings, p. 323.
19) cf. *Ibid.*, p. 327.

テスより知恵のある者はいない」という神託は、そのまま従えば、特に何も行動する必要はないものである。しかし、ソクラテスは、強い「無知の自覚」があったため、行動した。「従わない」という状態には、出来る限りならないようにその神託を反駁しようと試みたのである。

6.「無知の自覚」としての「知の表明」

だが何故、「知っています」というように言うのか。単純に、神に命ぜられていることだから止めるわけにはいかず、故に死を選びます、というような表現ではどうしていけなかったのか。この「不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜であることは知っています (*τὸ δὲ ἀδικεῖν καὶ ἀπειθεῖν τῷ βελτίονι καὶ θεῷ καὶ ἀνθρώπῳ, ὅτι κακὸν καὶ αἰσχρόν ἐστιν οἶδα*)」という言明についてさらに考えてみたい。

この「不正をなすこと」と「神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜であること」を結んでいる *καὶ* が補足説明を導くものであることは、すでに指摘されている[20]。ここでは「不正とは何か」が問題になっているわけではない。この言明は、ここでのソクラテスのにとっての「不正をなすこと」となること、つまり、「神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないこと」について、それを「悪であり醜」であると語っている言明なのである。

では、この「神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜」であるが、何故、「神であれ人間であれ自分より優れた者に従うことが善であり美」とは表現しなかったのであろうか。それは、やはりソクラテスの、「美しく善なること」を知らない「無知の自覚」故であると言える。また、ここからも、善美という価値に対する、悪醜という反価

20) R. Kraut, *Socrates and the State*, Princeton, 1984, p. 234, n. 74; C. D. C. Reeve, *Socrates in the Apology*, Indianapolis, 1989, p. 110, n. 6.

値といった図式を、ソクラテスは持っていないことが分かる。それもやはり「無知の自覚」故に持つことが出来ないのである。

では、「神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜」を「知っている」と「知」と表現していることは、どのように理解するべきであろうか[21]。

実のところ、「知」と表現出来る可能性は、先の3節で明らかになったように、ソクラテスには、あった。他の多数者よりも優れているという無知の自覚という点であれば、それを限定的な仕方ではあるが、知と言うことは出来ていたのである。

この知の表明も、その「無知の自覚」と共通のことを言っている、つまり、それと同じ事態の異なる表現のひとつであると理解出来る。「神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないこと」を「悪であり醜」とするのは、その従う対象より自分が優れていない、知恵がないことを認めることに他ならないからである。それは「無知の自覚」である。さらに、あくまでも無知を自覚しているわけであるから、「より優れた者に従うことが善であり美である」とはいかない。そうしてしまうと「善であり美である」ということに関してはっきりと知っていることになってしまうからである。

7. はじめから盲目的に優れた者に従うということもしない

では、そのような無知の中で、「よいことどもであるかどうかも知らないことども (*ἃ μὴ οἶδα εἰ καὶ ἀγαθὰ ὄντα τυγχάνει*)」を選びつつも、よく生きるためにソクラテスがしたことは、何だったのかといえば、優れた者に従わないという事態を避けることであり、また、はじめから、考察も加えずに、盲目的に優れた者に従うということもしないことであった。そ

21) Strycker & Slings, p. 327 によれば、この *οἶδα* は位置的にも強く強調されているとのこと。

のことが、「神であれ人間であれ自分より優れた者に従うことが善であり美である」と言わず、「不正をなすこと、神であれ人間であれ自分より優れた者に従わないことが悪であり醜である」と言っている理由のひとつである。これは、神託に対するソクラテスの態度にも表れている。ソクラテスは神託を鵜呑みにせず、解釈した。無知なる人間に出来る、神に従うということは、神託を鵜呑みにし、額面どおり受け入れるということではない。額面どおりとはいえそこに解釈は入り、解釈しているのは無知である自分なのだから。故にソクラテスは、その無知であるという自覚をもとに反駁しようとし、そうして意味を探ろうとした。無知であるため、分からないので、考えて、出来る限り従わないという事態を避けようとしているのだ。これが、その「優れた者に従わないという事態を避けること」であり、また、「はじめから盲目的に優れた者に従うということもしない」という態度なのである。

8. おわりに

『ソクラテスの弁明』におけるソクラテスの、「無知の自覚」と「知の表明」は、以上のような解釈により、齟齬をきたすことはない。「無知の自覚」におけるソクラテスが知らないと自覚する「神の知」、「美しく善なること」に関する知は、それ自体人間であるソクラテスには手に入れることは出来ないものである可能性が非常に高いが、ソクラテスは決して手に入れることが出来ないと言っているわけではない。そう言い切ってしまうことも、「美しく善なること」(に関する知) に関して断定していることになり、「無知の自覚」の反対である「無知の無自覚」とでも言えるような状態に繋がってしまうからだ。むしろ、徹底的な「無知の自覚」は、分からないながらも考察をし、努力をし続けること、考察しつつ優れた者に従わないという事態を避けることで、従おうとすることを、少なくとも『ソクラテスの弁明』のソクラテスにおいては意味していた。

つまり、29bにおけるソクラテスの「知の表明」は、「無知の自覚」と齟齬をきたすものではなく、ソクラテスが、「美しく善なること」に関して無知を自覚しつつも、「美しく善なること」に向かってはいっていることの証左なのである。

このように、29bの所謂「知の表明」を、『ソクラテスの弁明』内で解決することにより、『ソクラテスの弁明』におけるソクラテス像がより明確に立ち現れてきた。自らを無知だと思いつつ、その思いが強いが故に、不可知論に陥ることなく探求し続けた、文字通りの、フィロソフォス、哲学者像である。

また、今回と同様に、例えば『ゴルギアス』における「知の表明」と言われる箇所についても、それぞれの対話篇の固有の文脈において探ることにより、対話篇ごとのソクラテス像、またその対話篇の特徴が明らかになる。それらを比較することは、プラトン哲学全体の把握への寄与としては大きいものがあると思われる。それは今後の課題としていきたい。

付記：本稿は日本西洋古典学会第59回大会での発表原稿（2008年6月7日 於：同志社大学）に、修正を加えたものです。

（哲学科　非常勤講師）